

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 27 日現在

機関番号：31304

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23792553

研究課題名(和文)看護学生の首尾一貫感覚と心理社会的汎抵抗資源の因果関係の解明

研究課題名(英文)The causal relationship between sense of coherence and generalized resistance resources for the nursing students

研究代表者

下山田 鮎美 (ayumi, shimoyamada)

東北福祉大学・健康科学部・准教授

研究者番号：20315576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 600,000円、(間接経費) 180,000円

研究成果の概要(和文)：研究目的は、看護学生の首尾一貫感覚と心理社会的汎抵抗資源の因果関係の解明である。2009年度、2010年度入学生を対象に、臨地実習開始前と終了後に質問紙調査を実施した。130名のデータについて、開始前と終了後について平均値の差の検定(Wilcoxonの符号付順位検定)を行ったところ、教員からのサポートとサポート合計において有意差がみられた。また開始前と終了後における首尾一貫感覚とそれ以外の項目について相関係数を調べたところ、心理社会的学習環境、看護職としての職業的アイデンティティ、家族からのサポート、教員からのサポート、友人からのサポート、ソーシャル・サポートの合計に相関関係がみられた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to investigate the causal relationship between SOC(sense of coherence) and GRRs(generalized resistance resources) for the 130 nursing students. Wilcoxon signed-ranks test was used for the relationships between before and after Clinical Practice for Nursing to SOC and GRRs. Social support from the teacher and the total of the social support were significantly different compares with before and after situation. A correlation coefficient was used for SOC and GRRs at before and after Clinical Practice for Nursing. SOC was found to correlate with study environment, identity of a nurse, social support from the family, social support from the teacher, social support from the friend and the total number of the social supports.

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学

キーワード：首尾一貫感覚 汎抵抗資源 看護学生

1. 研究開始当初の背景

今日のわが国においては、看護職者の離職率が非常に高く、高度専門職業人としての能力とあわせストレス対処能力を高めていくことも求められている。そしてこのような状況において、看護職者のストレス対処能力を首尾一貫感覚(以下「SOC」とする)という概念を用いて検証し、その意義を見いだした研究も数多く見つけられるようになった。このSOCの発達・形成は汎抵抗資源(以下「GRRs」とする)の状況の影響をうけるとされており、看護職者のSOCの発達・形成には、子ども時代はもとより、成人初期に看護職者としての教育を受け、職業アイデンティティ及び社会的役割の獲得をめざす看護学生の学生生活における心理社会的GRRsが重要であると考えられる。

しかし、GRRsの状況に着目した研究は、横断的研究が少数みつけられるのみであり、特定集団のSOC及び心理社会的GRRsを追跡した縦断研究はみつけられなかった。

以上のことから、看護学生のSOCを高める教育プログラムの開発においては、特定集団のSOCの発達・形成とその影響要因とされる心理社会的GRRsの因果関係を明らかにすることが重要と考えられる。

2. 研究の目的

本研究では、看護学生のSOCと心理社会的GRRsの因果関係の解明を目的とした。

3. 研究の方法

2009年度入学生69名、2010年度入学生74名の計143名を対象に臨地実習開始前(ベースライン調査:3年前期)前半終了後(追跡調査:3年後期)後半終了後(追跡調査:4年後期)に質問紙調査を実施した。主たる調査項目は、学生の属性及び心理社会的な学習環境、臨地実習に臨む姿勢や臨地実習での体験、看護職としての職業的アイデンティティ、期待されるソーシャル・サポートの強さ(家族からのサポート、教員からのサポート、友人からのサポート、サポート合計)SOC-29とした。

分析は、調査毎に単純集計を行った後、心理社会的な学習環境、看護職としての職業的アイデンティティ、期待されるソーシャル・サポートの強さ(家族からのサポート、教員からのサポート、友人からのサポート、サポート合計)を心理社会的GRRsとみなし、SOC-29と共にベースライン調査と追跡調査で得られたデータについて平均値の差の検定(Wilcoxonの符号付順位検定)を行った。

また、2009年度入学生と2010年度入学生について、ベースライン調査で得られたデータを用い、これらの項目に関する平均値の差の検定(Wilcoxonの順位和検定)を行ったと

ころ、いずれも有意差がみられなかったため、2009年度入学生と2010年度入学生のデータを統合し、さらにベースライン調査と追跡調査で得られたデータについて平均値の差の検定(Wilcoxonの符号付順位検定)を行った。加えて、ベースライン調査と追跡調査で得られたデータについて、SOC-29とそれ以外の項目の相関係数を算出し無相関の検定を行った。

なおこれらすべての統計処理には統計解析ソフトSPSS21を用いた。

また本研究は、東北福祉大学研究倫理委員会の審査・承認を得て行った。

4. 研究成果

1) 2009年度入学生

(1) ベースライン調査

調査の対象数は69名、回収数(回収率)は55名(79.7%)、回答者の年齢の平均は20.7歳(SD2.18)、性別は男性が8名(14.6%)、女性が45名(81.8%)、無回答が2名(3.6%)であった。

心理社会的な学習環境のスコアは14.3(SD2.45)、看護職としての職業的アイデンティティのスコアは45.3(SD7.11)、期待されるソーシャル・サポートのスコアのうち、家族からのサポートは53.8(SD9.10)、教員からのサポートは38.3(SD9.59)、友人からのサポートは51.9(SD3.36)、ソーシャル・サポートの合計は144.1(SD18.41)、SOC-29のスコアは118.2(SD19.02)であった。

(2) 追跡調査

調査の対象数は67名、回収数(回収率)は58名(86.6%)、回答者の年齢の平均は21.09歳(SD0.85)、性別は男性が8名(13.8%)、女性が50名(86.2%)であった。

心理社会的な学習環境のスコアは14.7(SD1.95)、看護職としての職業的アイデンティティのスコアは45.8(SD7.72)、期待されるソーシャル・サポートのスコアのうち、家族からのサポートは53.5(SD9.70)、教員からのサポートは42.5(SD9.88)、友人からのサポートは54.0(SD7.02)、ソーシャル・サポートの合計は150.4(SD20.55)、SOC-29のスコアは120.0(SD19.74)であった。

またこれらの各項目について、ベースライン調査で得られたデータとの平均値の差の検定を行ったところ、教員からのサポートのみ有意差がみられた($p=0.003$)。

(3) 追跡調査

調査の対象数は67名、回収数(回収率)33名(49.3%)、回答者の年齢の平均は21.8歳(SD2.6)、性別は男性が5名(15.2%)、女性が28名(84.8%)であった。

心理社会的な学習環境のスコアは15.0(SD2.10)、看護職としての職業的アイデンティティのスコアは45.3(SD5.87)、期待されるソーシャル・サポートのスコアのうち、

家族からのサポートは 53.6 (SD9.20)、教員からのサポートは 44.7 (SD10.79)、友人からのサポートは 53.2 (SD7.05)、ソーシャル・サポートの合計は 151.5 (SD21.64)、SOC-29 のスコアは 117.2 (SD15.16) であった。

またこれらの各項目について、ベースライン調査で得られたデータとの平均値の差の検定を行ったところ、いずれの項目においても有意差はみられなかった。

2) 2010 年度入学生

(1) ベースライン調査

調査の対象数は 74 名、回収数 (回収率) は 42 名 (56.8%)、回答者の年齢の平均は 20.4 歳 (SD0.50)、性別は男性が 3 名 (7.1%)、女性が 39 名 (92.9%) であった。

心理社会的な学習環境のスコアは 14.5 (SD2.26)、看護職としての職業的アイデンティティのスコアは 43.1 (SD9.16)、期待されるソーシャル・サポートのスコアのうち、家族からのサポートは 51.9 (SD9.45)、教員からのサポートは 41.2 (SD9.53)、友人からのサポートは 51.8 (SD10.06)、ソーシャル・サポートの合計は 145.0 (SD24.31)、SOC-29 のスコアは 115.9 (SD15.22) であった。

(2) 追跡調査

調査の対象数は 74 名、回収数 (回収率) は 60 名 (81.1%)、回答者の年齢の平均は 21.02 歳 (SD0.23)、性別は男性が 8 名 (13.3%)、女性が 52 名 (86.7%) であった。

心理社会的な学習環境のスコアは 14.3 (SD2.19)、看護職としての職業的アイデンティティのスコアは 43.0 (SD8.25)、期待されるソーシャル・サポートのスコアのうち、家族からのサポートは 53.6 (SD9.21)、教員からのサポートは 42.8 (SD10.27)、友人からのサポートは 52.4 (SD9.01)、ソーシャル・サポートの合計は 148.9 (SD25.15)、SOC-29 のスコアは 121.2 (SD19.18) であった。

またこれらの各項目について、ベースライン調査で得られたデータとの平均値の差の検定を行ったところ、いずれの項目にも有意差がみられなかった。

(3) 追跡調査

調査の対象数は 74 名、回収数 (回収率) は 53 名 (71.6%)、回答者の年齢の平均は 21.57 歳 (SD0.57)、性別は男性が 5 名 (9.4%)、女性が 48 名 (90.6%) であった。

心理社会的な学習環境のスコアは 14.8 (SD1.91)、看護職としての職業的アイデンティティのスコアは 43.5 (SD7.27)、期待されるソーシャル・サポートのスコアのうち、家族からのサポートは 54.1 (SD8.43)、教員からのサポートは 41.2 (SD9.20)、友人からのサポートは 52.7 (SD8.90)、ソーシャル・サポートの合計は 147.8 (SD21.69)、SOC-29 のスコアは 120.1 (SD18.37) であった。

またこれらの各項目について、ベースライ

ン調査で得られたデータとの平均値の差の検定を行ったところ、ソーシャル・サポートの合計のみ有意差がみられた ($p=0.01$)。

3) 2009 年度入学生、2010 年度入学生の統合

2009 年度入学生及び 2010 年度入学生の計 143 名のうち、当該年度学生を対象とした調査において 1 度でも回答が得られた 130 名を対象として分析を行った。

ベースライン調査の対象数は 143 名、回収数 (回収率) は 95 名 (66.4%)、回答者の年齢の平均は 20.56 歳 (SD1.66)、性別は男性が 11 名 (11.6%)、女性が 84 名 (88.4%) であった。追跡調査の対象数は 141 名、回収数は 86 名 (61.0%)、回答者の平均年齢は 21.05 歳 (SD0.61)、性別は男性が 10 名 (11.6%)、女性が 76 名 (88.4%) であった。

(1) 平均値の差の検定

心理社会的な学習環境、看護職としての職業的アイデンティティ、期待されるソーシャル・サポートの強さ (家族からのサポート、教員からのサポート、友人からのサポート、サポート合計)、SOC-29 について、ベースライン調査と追跡調査の平均値の差の検定 (Wilcoxon の符号付順位検定) を行ったところ、教員からのサポート ($p=0.009$) とサポート合計 ($p=0.019$) において有意差がみられた。

(2) 相関関係

ベースライン調査における SOC-29 とそれ以外の項目について相関係数を調べたところ、心理社会的な学習環境 0.204、看護職としての職業的アイデンティティ 0.529、家族からのサポート 0.318、教員からのサポート 0.271、友人からのサポート 0.314、ソーシャル・サポートの合計 0.383 といずれにおいても相関関係がみられた。また無相関の検定における有意確率についても、心理社会的な学習環境 0.000、看護職としての職業的アイデンティティ 0.000、家族からのサポート 0.002、教員からのサポート 0.009、友人からのサポート 0.003、ソーシャル・サポートの合計 0.000 となっており、相関があるといえることが明らかとなった。

さらに追跡調査における SOC-29 とそれ以外の項目について相関係数を調べたところ、心理社会的な学習環境 0.322、看護職としての職業的アイデンティティ 0.392、家族からのサポート 0.391、教員からのサポート 0.258、友人からのサポート 0.389、ソーシャル・サポートの合計 0.423 といずれにおいても相関関係がみられた。また無相関の検定における有意確率についても、心理社会的な学習環境 0.004、看護職としての職業的アイデンティティ 0.000、家族からのサポート 0.000、教員からのサポート 0.014、友人からのサポート 0.000、ソーシャル・サポートの合計

0.000 となっており、相関があるといえることが明らかとなった。

4) 考察

本研究では、臨地実習の前後において、学生の SOC 自体の変化は認められなかった。その一方、先行研究の中には、特定領域に関する臨地実習前後という短期間において SOC が有意に変化したことを報告しているものもみうけられる。本研究は全領域に関する臨地実習の前後比較、つまり約 1 年間という長期にわたる SOC の変化を捉えようとしたものである。本研究と先行研究は前後比較に用いた期間が異なり、また多様な領域での臨地実習の経験が複合されるため、結果を単純に比較することは難しいが、看護学生の SOC の発達・形成に対する臨地実習の影響を議論する際には、短期的影響と長期的影響を分けたうえで検討を要する可能性が示唆された。

また、臨地実習の前後においては、ソーシャル・サポートに対する期待、その中でも特に教員からのサポートへの期待が強まっていたことが明らかになった。これは、講義や演習とは異なり、臨地実習においては、学生と実習指導教員が直接的に関わる機会、学生が実習指導教員からのサポートを必要とする機会が増加すること、それによって学生がサポートを受ける機会も多くなり、その際の実習指導教員の何らかの関わりが、教員のサポートに対する学生の期待を高めることにつながっていたことを示唆するものと考えられる。

さらに、臨地実習前後とも、SOC と心理社会的学習環境、看護職としての職業的アイデンティティ、期待されるソーシャル・サポートの強さ（家族からのサポート、教員からのサポート、友人からのサポート、サポート合計）には相関関係があることが明らかになった。これは、これらの項目が心理社会的 GRRs として看護学生の SOC の発達・形成に関連していることを示唆するものと考えられる。一部の先行研究の中には、看護学生の SOC の発達・形成に対する看護職としての職業的アイデンティティの影響を示唆しているものが見られる。本研究はその結果を支持するものとみなすこともできる。一方、期待されるソーシャル・サポートの強さとの関係についての先行研究は見受けられていない。これらのことから、看護学生の SOC の発達・形成に資する心理社会的 GRRs の解明を目指した研究は萌芽期にあり、今後の研究の蓄積が必要と考えられる。

5) 今後の課題

看護学生の SOC と心理社会的 GRRs の因果関係及び看護学生の SOC の発達・形成に資する臨地実習の役割の解明においては、さらなる詳細な分析が必要である。

本研究の今後の課題としては、これまで言及してきた知見を踏まえ、縦断データを用い

て共分散構造分析を行い、看護学生の SOC と心理社会的 GRRs の因果関係を解明すること、臨地実習における看護学生の SOC の発達・形成に有用な心理社会的 GRRs の形成過程を質的に分析することがあげられる。今後も研究活動を継続することにより、看護学生の SOC の発達・形成に資する教育プログラムの開発を目指していきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

下山田 鮎美 (SHIMOYAMADA AYUMI)
東北福祉大学健康科学部・准教授
研究者番号：20315576